

鉄人兵団・新鉄人兵団映画紹介

理学研究科 博士後期課程 2年 宮田 潔志

● はじめに

2011年3月5日、『映画ドラえもん のび太と新鉄人兵団』の封切り日。F同のメンバーで映画館に開店アタックしたのは記憶に新しい。筆者にとっては6年ぶりに映画館で見る大長編 — とりわけ声優が替わってから映画館に足を運んだのは初めてであった。原作である鉄人兵団ももともと大好きな作品だったのもあって、開演を待つまでは期待と不安が半々だった。

鑑賞後に一番に思ったことは、「これはすごい映画を作ってくれた！」というありったけの満足感だった。笑いあり涙あり、大人から子どもまで楽しめる洗練されたストーリーとセンスの良いリメイク。ドラえもんであることを抜きにしても、人生で見えてきた映画の中でももっとも面白かった映画であると胸を張って言える。余談だが、実はその日のうちにもう一度別の映画館で鑑賞した。一日に同じ映画を2回見たのはこの時が唯一だ。

今回、NFにあたって文集でリメイクされた映画を特集するといったことが決まり、恐れ多くも鉄人兵団の記事を担当させていただくこととなった。心底大好きであるこの作品、筆者が感じた感動を少しでも伝えられたらとの思いで記事を書かせていただく。新旧の映画の比較をメインに据えて、「なぜ新鉄人兵団はこんなに面白かったのか」を今一度思い返してみた。どこまで伝わる文章を書けたが皆目自信はないが、どうかお付き合い下さい。

● 漫画原作

大長編としては第7作目の作品。地球の存亡をかけたスケールの大きな迫力たっぷりのアドベンチャーでありながら、ロボットと人間の友情といったドラえもんならではのハートフルなテーマも織り交ぜた重厚なストーリー展開で、人気が高い。なお、今では定番の冒頭の「ドラえもん〜ん」が導入された初めての作品でもある。

この作品を特徴づけている要素として、2つの点を強調しておきたい。一つは、ストーリーの軸がリルルと静香にあるといった点である。実際、全大長編を通じてもっとも静香の出番が多い作品であることも知られている。ロボットであるリルルが静香との心のふれあいを通じて思いやりの感情を育み、結果としてそれが人類を救うわけだ。静香だけ他のメンバーとほとんど独立した行動を取っていて、描写も切り離して描かれている印象が強い。

もう一つは、敵である鉄人兵団の迫力、恐ろしさである。当時、藤子・F・不二雄先生自身も「ドラえもん映画史上最強の敵」と語っている。加えて、冒険の舞台が鏡面世界とはいえども“現在の地球”＝“私たちに最も身近な世界”であるといった点も強調しておきたい。私たちの世界が、今までにない強大な敵に侵略されようとしている、この構図が見る側に臨場感を感じさせ、物語全体にシリアスさを演出していると考えられる。

なお、普通に友人との会話でドラえもんの映画の話になった時も、鉄人兵団はよく話題にのぼる。数ある大長編の中でもひとときわ異彩な存在感を放っていることは確かだ。

● 映画ドラえもん のび太と鉄人兵団

1986年（偶然にも筆者が生まれた年である）公開。基本的に漫画原作に忠実な作りとなっている。映画ならではの表現技法であるセリフの間のとり方なども違和感はありません。原作の世界観を壊さずに上手くまとめた印象。しかし、上映時間の関係か全体的に急ぎすぎているような印象を持った。特にリルルの心情描写については、心変わり（「人間を奴隷に！」→「人間を奴隷にするのは悪いことです！」）があまりに唐突な感じがした。リルルの心情変化はストーリーの根本をなしている重要な部分なので、もう少し丁寧に描写をして欲しかったというのが本音である。

映画ならではの名シーンとして挙げておきたいのが、終盤のリルルが鉄人兵団のもとに鏡面世界の秘密を明かしに行く、と言ったときにのび太が「そんなことするなら撃つぞ！ 本気だぞ！」と銃を構えるシーンだ。この言葉に対してリルルは、一瞬ふっと微笑みを見せ、「いいわ、撃って」と答える。その後の「撃ないと私は止まらないわよ」「撃って！」「意気地なし！」といった一連ののび太とのやり取りが極めて巧みにリルルの内心を描写していると感じる。リメイク版ではこのシーンは変更されているので（後述）、これは旧作ならではの名シーンとしてどうしても挙げておきたい。

あと、スネ夫のロボット、ミクロスが異質な存在感を発揮していることも触れておこう。全体的にはシリアスな作りなので、そのコミカルなキャラクターが良い感じに引き立っている気がする。地味にミクロスファンって多い気がしますし。

主題歌「私が不思議」はリルルの心情変化をイメージしての歌だろう。個人的には、静香の「ときどき理屈に合わないことをするのが人間なのよ」のセリフを想起させられる。

● 新・のび太と鉄人兵団 ～はばたけ天使たち

2011年3月公開。大長編として31作品目に当たる。新魔界大冒険を手がけた寺本幸代監督のもとリメイクされた。鉄人兵団もゲストキャラクターが女性ということもあって起用されたと考えられるが、期待に十二分に応えるセンスの良いリメイクがなされており、非常に高い評価を受けている。

最も大きくリメイクされた点としては、やはり新キャラ『ピッポ(=ジウド)』を加えた点といってよいだろう。このキャラを軸に、ストーリー構成も大きく影響を受けている。何より静香-リルルに加え、のび太-ピッポというもう一つの友情ラインを加えたことで、リルルの感情の変遷、描写がより自然に感情移入できる作りになっている。また、ゆるキャラっぽい子ども受けしそうな容姿と親しみやすいような名前、一方でピッポがかつて迫害を受ける側の立場であったことや、リルルとの過去のくだりなどのシリアスな設定も細くなくなされていて、子どもも大人も自然と感情移入できるような丁寧な心情描写、背景描写の工夫がなされている。

一つ、今回のリメイクを象徴しているシーンとして、ジウドを仲間にするシーンを挙げたい。旧作では脳を改造することで仲間にしており、このシーンが作品の流れ(=思いやり、人間-ロボット間の友情)に反しているといった指摘があったが、ピッポというキャラクターとして登場させることにより、リメイク版では友情を育むことで仲間にするといった形になっている。

また、アニメの技法やBGMが発達したこともあってか、戦闘シーンなどの迫力が格段にアップしている。あと現代風のキレの良いギャグもタイミングよく随所に散りばめられており、見ていて飽きないような工夫がなされている。全体としてとにかく丁寧に作りこまれていて、完成度が高い。

いくつか取り立てて素晴らしかった名シーンを挙げておこう。

✓ **ピッポが湖のほとりでのび太に心を開くシーン**

原作にはなかったシーン。ふとしたことで感情が爆発したピッポが号泣しながらのび太に寄ってくるシーンだが、ここでののび太の受け止め方が絶妙。諭すでもなだめるでもなく、ただ黙ってピッポを見ている。これがのび太がピッポを対等な関係として扱っていることを象徴していて、一見目立たないが巧い描写だと感じた。

✓ **階段でリルルがのび太を撃つシーン**

旧作の紹介で筆者が大好きなシーンとして挙げた部分。リメイク版では、ここにピッポが割り込んできてリルルを説得する。結局リルルはのび太を撃とうとするが、のび太をかばったピッポが代わりに撃たれる。旧作とは大きくテイストが異なるが、リルルの心変わりのきっかけとしてはよりわかりやすい形になっている。

✓ クライマックスの最後のシーン

ピッコ、リルルとの別れのシーン。リメイクとして素晴らしいと感じたのが、アムとイムの改造を最後はリルル自身が行うといった形に変更されていたこと。自分自身が消えてしまうということを自覚しながら改造を遂行するところに、リルルの覚悟が表れている。また、別れ際のピッコの「その名前、大好きだよ…」というセリフがこの上なく涙腺を攻めてくる。

BUMP OF CHICKENによる主題歌『友達の唄』もまた作品の内容と深くリンクしており、映画の余韻を深めさせられる。PV やジャケットも映画のシーンを想起させる作りになっており、ファンには嬉しい仕様。なお、エンディングで歌詞が画面に表示されたのはドラ映画史上初めて。

● 小説版ドラえもん のび太と鉄人兵団

2011年、新鉄人兵団の封切り直前に、小学館からドラえもん好き作家として有名な瀬名秀明によるノベライズ化がされている。長編のノベライズはドラ史上初めて。旧作のシナリオを軸にして一部独自の解釈とアレンジを加えて書かれている。小説ならではの丁寧な描写が新鮮で、読みやすい仕上がりとなっている。

アレンジの特徴としては、鏡面世界だけでなく現実世界の描写が比較的多めに書かれていることが挙げられる。現実サイドの描写に星野スミレや任紀高志といったキャラがキーパーソンとしても出場しており、原作を知っていても新鮮に楽しめる。特に最後の鉄人兵団が消滅する直前のシーンの現実世界とのリンクした描写は流石といった感じだ。興味のある方は是非読んでみて欲しい。

● おわりに

正直、筆者は声優が変わった後しばらくドラえもんから離れていた。しかし、今は新鉄人兵団のような原作を超えたといっても過言ではない素晴らしい作品を産み出せるポテンシャルを持っていることを認識することができ、今後のドラえもんについても期待でいっぱいである。かつての筆者と同じように「昔のドラえもんの方が良かった」といって今のドラえもんから距離をおいている方にも、今一度今のドラえもんに目を向けて欲しい。そして、今のドラえもんならではの良さを感じて、昔と変わらぬ応援をして欲しい。確かに「声優が変わった」ことは大事件ではあったが、それだけを理由に離れてしまうのはあまりに残念でもったいないと思うのだ。

なお、来年公開予定の映画は新鉄人兵団と同じ、寺本幸代 監督、清水東 脚本である。しかも寺本監督初の完全新作。筆者はもう今からワクワクが止まらない。